

地球儀を回せば万緑滴り落つ

杉木立千年瀧を見てをりぬ

行く春や水脈ひとすじに島を曳く

麦笛ののぼりゆくらし風の中

天道虫子の手に花のごと摘まる

紫陽花の露千の萼よりこぼれ落つ

交差点を大ひろがりに喜雨の中

父の字を山頂なせり椎若葉

亡骸の葉に埋もるや蟻の塚

もの音は黴の食ふ音書肆昏し

扇風機闇に向ひて舞ひ了はる

白秋のデスマスクあり秋の暮

掘割の空蒼きより木の実落つ

秋天のどこかに翳の生れつつある

秋の蝶一谷渡るゆたゆたと

夏の蝶真昼の海に君臨す

里神楽拍つ手踏む足老ひにけり

落人の山くろぐろと眠りけり

唾蟬のいつやら苔に埋みゐて

蝉時雨曾良の墓より下りきたる

雷一闪夜の対馬をはすかひに

大ひなる海を背負ひて墓洗ふ

炎天を背中に負ふて電車待つ

船酔ひの吾子ものいはず泪溜め

初秋やガラスの子らが光打つ

この人もこの人も秋鐘の寺

原爆忌昨日が見ゆる火の中に

原爆忌猫いづくかへ疾駆する

真清水のごと夏潮を掬ひ汲む

漏斗雲嵐の予感秘めしまま

雲海を貫き山の濡れしまま

千灯籠千の螢火舞ひ上がり

里の秋光る陽やさし牛の糞

葉蘭翻る驟雨に洗ひ濯がれて

法師蝉鳴きたつ入江暮れ残り

虚空より放てるごとく蟹流る

古の都は暮れず秋の風

行擦の古人や影朧

狛犬の苔濡らしゆく片時雨

里神楽八咫鳥面躍り込み

神楽唄うねりうねりて月にまで

笙の音の友儂きや神楽唄